

キャンパスツアー2019



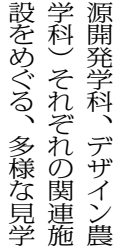
特設トークブース



特別講義



栽培中のペピーノ。ナス科の野菜(厚木キャンパスでの研究によって、メロンに匹敵する甘さになり、普及を目指して研究が続けられている)



厚木キャンパスツアーは、5月26日に開催された。ガイド役として現役の農大生が活躍した。参加者は、自分たちと年齢が近い学生ガイドと気軽に質疑応答をしながら、いろいろな施設を見学していった。

厚木キャンパスツアー(A&E)が用意された。ガイド役として現役の農大生が活躍した。参加者は、自分たちと年齢が近い学生ガイドと気軽に質疑応答をしながら、いろいろな施設を見学していった。

厚木キャンパスツアー(A&E)が用意された。ガイド役として現役の農大生が活躍した。参加者は、自分たちと年齢が近い学生ガイドと気軽に質疑応答をしながら、いろいろな施設を見学していった。

厚木キャンパスツアー(A&E)が用意された。ガイド役として現役の農大生が活躍した。参加者は、自分たちと年齢が近い学生ガイドと気軽に質疑応答をしながら、いろいろな施設を見学していった。

厚木キャンパスツアー(A&E)が用意された。ガイド役として現役の農大生が活躍した。参加者は、自分たちと年齢が近い学生ガイドと気軽に質疑応答をしながら、いろいろな施設を見学していった。

厚木キャンパスツアー(A&E)が用意された。ガイド役として現役の農大生が活躍した。参加者は、自分たちと年齢が近い学生ガイドと気軽に質疑応答をしながら、いろいろな施設を見学していった。

厚木キャンパスツアー(A&E)が用意された。ガイド役として現役の農大生が活躍した。参加者は、自分たちと年齢が近い学生ガイドと気軽に質疑応答をしながら、いろいろな施設を見学していった。

厚木キャンパスツアー(A&E)が用意された。ガイド役として現役の農大生が活躍した。参加者は、自分たちと年齢が近い学生ガイドと気軽に質疑応答をしながら、いろいろな施設を見学していった。

厚木キャンパスツアー(A&E)が用意された。ガイド役として現役の農大生が活躍した。参加者は、自分たちと年齢が近い学生ガイドと気軽に質疑応答をしながら、いろいろな施設を見学していった。

厚木キャンパスツアー(A&E)が用意された。ガイド役として現役の農大生が活躍した。参加者は、自分たちと年齢が近い学生ガイドと気軽に質疑応答をしながら、いろいろな施設を見学していった。

夏はオープンキャンパスで!
夏には、見るだけじゃなく、聞いただけじゃなく、体験イベントが満載のオープンキャンパスが開催される。東京農大の「実学」を体感でき、例年多くの高校生・受験生が訪れている。

【世田谷】8月4日(日)、5日(月) 10時~16時(予約不要)
【厚木】8月4日(日)、5日(月) 10時~16時(予約不要)
【北海道オホーツク】7月27日(土)、28日(日) 10時~16時(要予約)

ホームカミングデー 更なる飛躍を祈念
「親子三代表彰」「東京農大貢献賞」など表彰

「創立記念を祝う会」並びに第19回東京農大ホームカミングデーが6月15日、世田谷キャンパスで開催された。本行事は創立128年を迎えた東京農大の将来についての想いを卒業生と共有することを目的としており、総勢431人が来場した。

高野克己学長の挨拶に続いて、親子三代にわたって東京農大を卒業している方を表彰する「親子三代表彰」が、東京農大大貢献賞など表彰



壇上に並んだ今回の受賞者たち



江口文陽教授



森和義さん

「東京農大大貢献賞」には、江口文陽教授(森林総合科学科)が選出された。これは、社会貢献や学術的な功績で東京農大に貢献したと認められた。

最後は、全学応援団によるリレー公開により東京農大の更なる飛躍を祈念し、幕を閉じた。終了後は、キャンパス内の懇親会場において、本学教職員らも加わり旧交を温めた。

「創立記念を祝う会」並びに第19回東京農大ホームカミングデーが6月15日、世田谷キャンパスで開催された。本行事は創立128年を迎えた東京農大の将来についての想いを卒業生と共有することを目的としており、総勢431人が来場した。

高野克己学長の挨拶に続いて、親子三代にわたって東京農大を卒業している方を表彰する「親子三代表彰」が、東京農大大貢献賞など表彰



温室で学生ガイドの説明に聴き入る参加者たち



雑木林で昆虫採取の仕掛けに見入る

の名声を高めた教職員を表彰するもの。江口教授は、「きのこの生産技術開発と機能解析」と題して講演した。

また、ベスト・ティーチャー賞6人とベスト・レクチャー賞1人の表彰と、造園家の涌井史郎さんによる特別記念講演も行われた。

最後は、全学応援団によるリレー公開により東京農大の更なる飛躍を祈念し、幕を閉じた。終了後は、キャンパス内の懇親会場において、本学教職員らも加わり旧交を温めた。

の名声を高めた教職員を表彰するもの。江口教授は、「きのこの生産技術開発と機能解析」と題して講演した。

また、ベスト・ティーチャー賞6人とベスト・レクチャー賞1人の表彰と、造園家の涌井史郎さんによる特別記念講演も行われた。

最後は、全学応援団によるリレー公開により東京農大の更なる飛躍を祈念し、幕を閉じた。終了後は、キャンパス内の懇親会場において、本学教職員らも加わり旧交を温めた。

の名声を高めた教職員を表彰するもの。江口教授は、「きのこの生産技術開発と機能解析」と題して講演した。

また、ベスト・ティーチャー賞6人とベスト・レクチャー賞1人の表彰と、造園家の涌井史郎さんによる特別記念講演も行われた。

最後は、全学応援団によるリレー公開により東京農大の更なる飛躍を祈念し、幕を閉じた。終了後は、キャンパス内の懇親会場において、本学教職員らも加わり旧交を温めた。

東京農大の「らしさ」幅広さを存分に見学

東京農大「キャンパスツアー2019」が5月、6月に世田谷・厚木の両キャンパスで開催された。東京農大を志望している、もしくは興味がある、という高校生や保護者に向けた恒例行事であり、1日で全学部学科について知ることができる。特色ある展示や学科の説明を通して東京農大の今を存分に見学するために、多くの高校生が参加した。



学部学科間で協力できる 研究の強みを紹介

日付・参加者数
6月9日(日)
927人
6月23日(日)
1143人

世田谷キャンパスツアーは6月9日、23日の計2回開催された。当日は多くの東京農大生も協力し、学生ガイドとしてキャンパスを案内した。勉強や大学生活など参加者が気になることを直接、在学生や先生に質問できる特設トークブース、また、農学部と生物産業学部を紹介するコーナーも用意された。

また、大教室では、「健康」をテーマにした特別講義も行われた。「食べてダイエットできるか?」「食物で病気を治す」「発展途上国での

子供は健康を考える」など、興味津々の表情で耳を傾けていた。本学を扱ったテレビ番組を観たのがきっかけで今回参加したという中村円香さんは、地域創成科学科について「地域のひととの交流や現地に赴いてのフィールドワークがたくさんあると聞いて興味を持ちました。実際に大学に来て見学することで、イメージが具体的にできました」と語った。

また、大教室では、「健康」をテーマにした特別講義も行われた。「食べてダイエットできるか?」「食物で病気を治す」「発展途上国での

子供は健康を考える」など、興味津々の表情で耳を傾けていた。本学を扱ったテレビ番組を観たのがきっかけで今回参加したという中村円香さんは、地域創成科学科について「地域のひととの交流や現地に赴いてのフィールドワークがたくさんあると聞いて興味を持ちました。実際に大学に来て見学することで、イメージが具体的にできました」と語った。

子供は健康を考える」など、興味津々の表情で耳を傾けていた。本学を扱ったテレビ番組を観たのがきっかけで今回参加したという中村円香さんは、地域創成科学科について「地域のひととの交流や現地に赴いてのフィールドワークがたくさんあると聞いて興味を持ちました。実際に大学に来て見学することで、イメージが具体的にできました」と語った。

子供は健康を考える」など、興味津々の表情で耳を傾けていた。本学を扱ったテレビ番組を観たのがきっかけで今回参加したという中村円香さんは、地域創成科学科について「地域のひととの交流や現地に赴いてのフィールドワークがたくさんあると聞いて興味を持ちました。実際に大学に来て見学することで、イメージが具体的にできました」と語った。

子供は健康を考える」など、興味津々の表情で耳を傾けていた。本学を扱ったテレビ番組を観たのがきっかけで今回参加したという中村円香さんは、地域創成科学科について「地域のひととの交流や現地に赴いてのフィールドワークがたくさんあると聞いて興味を持ちました。実際に大学に来て見学することで、イメージが具体的にできました」と語った。

TheNEWS

東京農大

「生きる」を支える

TOKYO UNIVERSITY OF AGRICULTURE 1891

東京農業大学

世田谷キャンパス 大学本部
大学院・応用生物科学部
生命科学部・地域環境科学部
国際食料情報学部
厚木キャンパス
大学院・農学部
北海道オホーツクキャンパス
大学院・生物産業学部

4月・7月・11月 発行

編集 東京農業大学学長室
〒156-8502
東京都世田谷区桜丘1-1-1
<http://www.nodai.ac.jp>

「研究室から」やりたいことを自分本位に追求……………2
農大出身の25歳元「豪華饗宴」……………2
「総研ニュース」環境DNAから探る伝染病経路……………3
「活躍する卒業生」NYの青空に響く農大同期の旧交……………3
オホーツク野球部・初の全日本大学選手権ベスト4……………4
外国人留学生懇談会……………4

東京農業大学

創設128年

収穫祭

本祭

〔世田谷〕11月1日(金)~3日(日)

〔厚木〕11月2日(土)~3日(日)

〔北海道オホーツク〕10月13日(日)~14日(月)

体育祭

〔世田谷・厚木〕11月4日(月)

〔オホーツク〕9月14日(土)

研究室から

東京農業大学大学院
生物産業学研究科生物産業学専攻
博士後期課程1年
海洋生物学研究室

高野 延道さん

それは、失意の中から始まった。ゴマフアザラシと向き合い、日々、調査研究を行っている高野延道さん。「長くこの研究に携わりたい」と大学院の門を叩く転機となったのは、「たまたま興味を持った」からだ。自分のやりたいことを自分の意思で積極的にできる大学院という場所の魅力、そして将来の目標を語ってもらった。

海洋生物学研究室は、オホーツク圏とその隣接冷水域の大型脊椎動物、無脊椎動物の調査研究を行っている。なかでもアザラシ類には特に注目しており、野外調査による生態解明、骨格観察や遺伝情報による集団解析などを通して、人間活動との関わりを考え続けている。

高野さんは、海生哺乳類の生理・生態とその管理学を研究する小林万里教授の指導のもとで、ゴマフアザラシと向き合っている。「混獲や有害駆除によって得られたゴマフアザラシを解剖し、摘出された胃を開いてその内容を分析しています。胃内に残留している耳石や頭足

類の顎板を計測し、アロメトリに当てはめ餌生物の体長や重量を再現し、そこから各指標や獲得エネルギー量を算出し、成長段階や雌雄による食性の変化の把握や採餌戦略の推定を行っています。指導してくれる小林教授と、疑問や論理の整合性について逐次話し合いながら、今後の研究の方針や胃内容分析以外の手法の導入検討などを議論する日々だ。

「長くこの研究に携わりたい」と大学院進学を決めた高野さん。しかし、大学入学当初からこうした思いがあったわけではない。「志望していた国立大学の二次試験に失敗し、失意の中、せめて大学での教育課程を修了したという

肩書を、と思い東京農大に入学しました。あくまでも滑り止め目的での受験だったので、志望学科の選択についても深く考えていませんでした。海洋への興味など微塵もないのに海洋水産学系の学科に入学した、というのが正直なところだ。

そうした経緯もあり、学部生ころの高野さんは、授業でレポートを書くために必要な最低限のこと

としかしていなかったという。「それほど向上心があつたわけでもなく、授業内容を広く浅く学ぶだけの、勤勉とは言えない学生でした」と振り返る。一方で、知らず知らず吸収していた海洋に関する知識が、卒業論文を書く段になって生きてくることになる。

最前線の教授陣と積極的に意見交換

学部時代の経験が無駄ではなかったと研究室に配属されてから実感した、という高野さん。それは、達成感にもつながっている。「修士論文の執筆にあたって、苦勞しながらも、それまでに集めた膨大なデータをなんとかまとめ上げることができたのは、つらかったと同時に、うれしかったです。製本された修士論文を見たときは、なんとも言えない気分となりました」。同時に、指導教授への思いもある。「完成まで指導してくださった小林教授には感謝してもきれません」

大学院の良いところは、自分がやりたいことを自分の意思で積極的にできることだ、と高野さんは感じている。「加えて、研究の最前線に身を置く教授陣と積極的に意見を交換することができ、知識と理解を深めることができる。大学院の魅力です。逆に、積極的に学ぼうとしなければ何もできない場所だ、とも語る。「きつい言い方かもしれませんが、自分の研究内容に夢中にならない人には大学院は厳しいかと思います。誰かの期待に応えるといった他人本位ではなく、自分の意思でやりたいことを自分本位に追求していく気持ちで、大学院の門を叩いてほしいです」

高野さんの目標は、データを継続して収集して、より詳細にゴマフアザラシの食性を解明すること、より多角的に本種の食性を把握するための手法として、安定同位体比分析など胃内容分析以外の手法を導入することだ。

卒業後は、「培ってきた知識、経験、直感を生かすことのできる研究職」に進みたいと考えている。



ゼニガタアザラシの横に寝そべる高野さん



農大出身の25歳元「豪華饗宴」



東京農業大学「食と農」の博物館では、本学を卒業して全国で酒造りをしている卒業生蔵元の幾つかを紹介し、その酒瓶280本を常設展示している。「実際に飲んでみたい」との声に応える試飲会が6月22日、世田谷キャンパスで開催された。今年で2回目の開催となる。北は岩手、秋田から南は沖縄までの総勢25蔵が参加した「豪華饗宴」に、多くの人々が足を運んだ＝写真。

日本酒や焼酎など100種を超える銘柄がそろい、1杯100円から味わうことができる。完全予約制・各回定員200人の全5部。訪れた人たちからは「いろんな種類が飲めて楽しい」「自分の知らなかったお酒を試してお気に入りを見つけない」「ゆっくり回って飲んで満足。来年も参加したい」といった声が聞かれた。

お手伝い学生として参加した赤川友梨さん（醸造科学科4年）は「酒蔵での実習経験を生かして来場者と交流できた」と話した。また、石本酒造として出店した遠藤伶さん（H24・醸造科学科卒業）は「お客さんたちの生の声を聞けるのがよかった。お酒の製造に生かしたい」と語った。

超満員となった会場は、お酒を通じた東京農大と地域の方との交流の場として大いに盛り上がった。

地域の方との交流で盛り上がる



来場者と笑顔で語らう赤川さん（中央）



石本酒造の遠藤さん（左）

環境DNAから伝染病の 拡散ネットワークを探る

学際プロジェクト

農学部動物科学科 米澤 隆弘
農学部生物資源開発学科 松林 尚志

家畜の感染症の中には、鳥インフルエンザや豚コレラと言った感染力が非常に高いものがある。こうした感染症は一度発生すると地域的な流行(エンデミック)を引き起こすが、感染地域の範囲や患者数が急激に拡大し通常想定される規模を超えるエピソードも、さらに流行の規模が大きくなり複数の国で同時に発生するパンデミックへと移行する可能性がある。こうしたエピソードやパンデミックは畜産業に大きな打撃を与えるため、



ヌタ場から環境試料を採取する、微量DNA解析の専門家・瀬川高弘博士(微生物学、山梨大学)

病原体の感染経路を断つことで流行の規模の拡大を防ぐことが重要



ヌタ場を観察する野生動物学研究室(農学部生物資源開発学科)の学生たち

である。

感染の拡大を防ぐために、人や車両が農場間を移動する際は消毒等が徹底して行われる。しかし、家畜の感染症の中には種を超えて感染する病原体も多々あり、野生動物の移動も含めた自然環境下の感染経路のネットワークを推定する必要がある。本プロジェクトは環境DNAを用いて感染経路ネットワークの推定を目指す。環境DNAとは「土壌中、水中あるいは空気中などの環境中に存在するDNA」の総称である。環境中には、そこに生息している生物の脱落した組織や排泄物などに含まれるDNAが存在する。ウイルスを含む微生物であれば、環境試料中にDNAを含んだ生物本体が存在する。こうした環境DNAを分析することで、その環境に生息する生物種の同定や生物量(バイオマス)を推計することができる。なお、鳥インフルエンザを引き起

こすA型インフルエンザウイルスや、豚コレラを引き起こす豚コレラウイルスは、DNAではなくRNAで構成されたゲノムを持つが、このようなRNAウイルスも解析可能である。

現在、私たちはヌタ場に注目して環境DNA解析を行っている。ヌタ場とは「山林中の小規模な湧水や水たまりなど、野生動物が泥浴びをしたり体を冷やしたりするのに用いる場所」のことで、イノシシをはじめとして多くの動物が利用していることが分かっている。イノシシなどが泥浴びをする

活躍する卒業生

- 阿部 紳一郎 (1974年 造園科卒業)
- 瀬川 正明 (1973年 造園科卒業)
- 山本 誠 (1973年 造園科卒業)
- 中見 宰 (1974年 造園科卒業)

作業中の様子。左から阿部さん、山本さん、瀬川さん、中見さん(樹木の上)



2019年4月、米国東海岸も桜の季節、東京農大造園科16期4人がニューヨークに集結した。国連本部ビルの日本庭園のメンテナンスを行うためである。

同日本庭園はメンバーの一人、阿部紳一郎さんが設計・施工したものである。デザインコンペを経て、2000年に竣工した。庭の中心は、日本が1954年に国連に寄贈した「平和の鐘」。庭には鐘を中心に国連旗と五大大陸のイメージがデザインされている。この庭は10年以上の間、日本人技師による手入れがなされてこなかった。そこで今回、阿部さんと同期3人、瀬川正明さん、山本誠さん、中見宰さんの計4人がそれを担うことになった。

NYの青空に響く農大同期の旧交

阿部さんは、東京農大を卒業後、ハーバード大学に進学。米国で造園会社Zen Associatesを設立し、ボストンを拠点に活動している。米国日本庭園作家5人衆にも選ばれた。瀬川さんは在学中、茶道部で活躍した。当時から「型破りな気風」で有名だったという。現在は筑波の山の中にセルフビルの家と庭を造り、自然と伝統とアバンギャルドが融合したライフスタイルを体現している。有限会社設計工房瀬川を主宰する。山本さんは、剣道三昧の学生時代を過ごした後、水景の道へ。噴水的设计施工に携わり、現在は株式会社ウォーターデザイン代表取締役。日本的な水の演出を海外にも展開している。中見さんは「地球号自然塾アカルトノア」を主宰し、マリンスポーツを通じた教育と造園という二足のわらじを履く。在学中は少林寺拳法部で汗を流した。

「気が付けばみんないい年になった」と4人は笑い合う。「なにしろ、農大に入学したのは、このニューヨーク集結のちょうど50年前だ」。しかし、皆まだまだ元気で、バリバリの現役である。今回が何十年ぶりの再会となったメンバーもいた。「卒業して何年経とうが、会えば

造園科16期4人が国連本部ビル日本庭園を手入れ

「おうー!」ですぐに気持ちが良い感じが農大生のいいところ」

4人は、余分な枝を落とし樹形を整えた手入れ後の国連本部ビルの日本庭園で、同期の旧交が新たな世界に広がることを願いつつ、また世界平和を願いつつ、献茶を捧げた。そして、平和の鐘を青空に一つ、ゴンと響かせた。



前列左から阿部さん、山本さん、瀬川さん、中見さん。後列は手伝ってくれた有志の方々。右に「平和の鐘」、左奥にクライスラービルが見える

「日ごろから防災意識を」



総勢4000人避難訓練

年に一度の大規模避難訓練が5月29日、世田谷キャンパスで実施された。午前11時半ちょうどに地震発生の警報が学内に鳴り響き、避難指示の放送が流れた。学生、教職員はもちろん、食堂などで働くスタッフの人たちも一斉に避難行動を開始する。避難開始からおよそ25分後、点呼完了。総勢4000人が無事、グラウンドへと避難完了した。写真。新部副学長から「8年前の東日本大震災の際には、恐怖から泣き出し動けなくなる人もいた。避難経路を確認し、日ごろから防災意識をもって臨んでほしい」と講評があった。

授業中、放課後、帰宅中など災害はいつ発生するか分からない。不測の事態にも対応できるよう、家族や教員などと情報共有をしておくことが大事だ。

全日本大学選手権

初のベスト4

北海道
オホーツク
硬式野球部

準々決勝ゴールド勝ち

「特別賞」の大会表彰

第68回全日本大学野球選手権大会が6月10～17日に開催され、東京農大北海道オホーツク硬式野球部が初の4強入りを果たした。全国26連盟の春季リーグ戦を勝ち抜いた27の代表校が、神宮球場と東京ドームを舞台に熱戦を繰り広げる大会。北海道オホーツク硬式野球部は、北海道六大学野球春季リーグ戦で優勝し、2年ぶり16回目の出場であった。



㊦古間木さん ㊧榎本さん ㊨ブランドンさん いずれも神宮球場で

1回戦、近畿大学工学部に延長タイブレークの末、6―5で勝利した。九回に同点に追いつかれたが、延長十回、古間木大登さん（自然資源経営学科2年）の2点適時打で決勝点を挙げる。4年ぶりの初戦突破だった。

2回戦、大阪体育大学に先制されるも三回以降は得点を許さず、0―2で迎えた八回、榎本竜成さん（地域産業経営学科4年）が逆転の3ランを放つ。九回に登板した中村亮太さん（地域産業経営学科3年）が1点を守りきり、22年ぶりのベスト8を果たした。

準々決勝は城西国際大学を8―1の七回コールドで破った。同点で迎えた五回、新宅優悟さん（地域産業経営学科4年）が右前適時打で勝ち越しと、ブランドン大河さん（地域産業経営学科3年）がチームを初のベスト4へ導く3ラン。勢いに乗った見事な勝利だった。

準決勝は雨で1日順延となった。相手は東京六大学代表の明治大学。前日の天候がウソのような快晴下、1年生右腕コンジの林虹太さん（自然資源経営学科1年）と伊藤英央さん（自然資源経営学科1年）が好投する。七回終わって1―1の投手戦だったが、八回に相手の集中打で一挙4点を失い、無念の敗退となった。

「最終目標は全国制覇」

応援席には全学応援団した快進撃に、惜しみな族、卒業生なども駆け付けていた。北の大地で鍛え上げているチームらしい粘りと結束力がもたら



大会に臨んだ北海道オホーツク硬式野球部のチーム一同＝神宮球場で

北海道オホーツク硬式野球部はチームとして「特別賞」を受賞した。就任2年目の三垣勝巳監督は「大声援の中、選手たちは全力でぶつかってくれた。今後さらに皆様に応援していただけるように、秋のシーズンに向けて網走に帰ってさっそく練習します」と振り返った。



にぎわう各国ブース

9月には第19回世界学生サミットが世田谷キャンパスで開催される。例年、国籍に関係なく、世界の食料、環境の問題について熱い討論が交わされる場だ。

世界へと目を向ける良い機会として、ぜひ本学の多くの学生に参加してほしい。

外国人留学生懇談会

11カ国の料理・民族舞踏も披露

東京農大の外国人留学生懇談会が6月6日、世田谷キャンパスで開催された。東京農大には現在、32カ国・地域179人の留学生が在籍している。

最初に高野克己学長

が、留学生へ向けて「本学での多様な学生との交流や研究活動を通じて、皆さんの学生生活がより充実したものとなるように頑張っていたください」と激励の言葉を述べた。坂田洋一国際協力センター長の乾杯のあいさつが、留学生の代表者から続いた。メキシコからの新留学生のSuzukiさん（国際農業開発学科）は、日本の文化に興味があり、また、環境や経済について学びたいと東京農大を選んだ。「4年間、東京農大で勉強して、メキシコと日本の懸け橋になれるよう頑張りたい」と語ってくれた。



つで懇談会が始まった。今回は、留学生による出店ブースが11カ国分設けられ、各国の食べ物や飲み物が振る舞われた。その後、新入留学生の紹介に続いて、フィリピンやブラジル、メキシコなど11カ国の留学生による民族舞踊のパフォーマンスが披露された。写真。鈴木貢次郎国際協力副センター長のあいさつをもって閉会となった。

